ある夫婦の物語

OL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある夫婦の物語

【Ｎコード】
Ｎ３９９３Ｖ

【作者名】
ＯＬ

【あらすじ】
好きな人ができた。
結婚２５周年を目前に迎えたある日、
まじめで誠実な夫から突然告げられた。
友達のような夫婦だった。
熱烈な恋愛をしたわけではなかったが、
穏やかな愛をはぐくんでいた。

そんな私のささやかながら、幸せな世界は崩壊した。

私は夫を愛してる。
夫は私を愛してる？

お弁当

- 好きな人が出来た。

結婚２５周年を迎えようとしたある日の突然の告白に、
私のささやかながら平穏な世界は崩れ落ちた。

私たちは友達のような夫婦だった。

高校を卒業してすぐ就職したのは、
社員の顔と名前が全員一致する程度の規模の中小企業だった。

当時日本はバブル真っ最中で、皆が競うようにお金を使った。
皆がランチに繰り出す中、私はお弁当を持参するのが日課だった。
親元から離れ、独り暮らしの私にはそんな余裕はなかったし、
何よりも、東京の浮かれた雰囲気に馴染めなかった。

白いゴハンに、梅干と夕飯の残りの煮物。
そして卵焼きという質素なお弁当だったが、電話番を買ってでながら事務所で一人で食べるのが、
一日で一番楽しい時間だった。

- おいしそうなお弁当だね。

営業マンで、めったに事務所に居ない彼から声をかけられたのは、
私の誕生日で、少し贅沢をして竹の子の炊き込みご飯を作ったある日だった。

うららかな陽気の日、パリッとスーツを着こなした彼に、
私は赤くなりただうなづくことしかできなかった。

その日からだった。
彼からの電話を受け取ると、いつもその日のお弁当の中身を聞かれた。
最初はただ、中身を伝えるだけでいっぱいいっぱいだったけど、
営業マンらしい彼の明るいトークに乗せられ、
だんだんと、軽い冗談を交えてやり取りできるようになった。

事務所の電話がなるのが楽しみになり、
彼からの電話ではないと、ちょっとがっかりするようになった。

お弁当の中身が少しだけ、華やかになった。

-いつもこんなおいしいお弁当を作ってくれる?

うだるような暑さの日、それでも彼は涼しそうにスーツを着ていた。
私は電話のような軽口がたたけず、やっぱり赤くなってうなづくしか出来なかった。

彼には当時、付き合っている女性がいた。
結婚相手を見つけるための腰掛仕事しかしない女性が大半の世の中で、
彼女は当時は珍しい女性総合職だった。

営業マンと肩をならべ、企画をバンバン出している彼女は女性の憧れの姿であり、
男性からは少し煙たがられていた。

彼はそんな彼女と付き合い、お互いを高めあっていた。

彼女はお茶くみをさせようとする頭の固い男性の多い社会に噛み付き、
会社を辞めて留学をしてしまった。

彼は会社で少し同情的な目で見られ、苦笑いしながら営業に出て行くのが常になった。

彼からプロポーズされたのは、皆が彼女を忘れかけたある夏の暑い日だった。
デートもしたことがない。職場でだってあまり話すことはなかった。
ただ、営業先からかけてくる電話で、少し軽口をたたくだけの私になんでプロポーズをしたのか。

そんなことはどうでも良かった。

この暑い中働く彼に、おいしいお弁当を作りたいと思った。

そして、季節は流れ、翌年の春、私たちは結婚した。

コーヒー

挽きたてのコーヒーが香る店内で、来客を知らせるドアベルが鳴る。

「いらっしゃいませ」

カウンターから振り返ると彼は懐かしむような、憐れむような。
ハンカチで顔をぬぐいながらぺこりと頭下げた。

あわてて私は、奥の席に案内した。

１０年前からパートで勤めているのは、若手の陶芸作家たちの作品を売り出すブティックだった。
店内の一角に小さなカフェコーナーがあり、作家たちが売りこんできた食器でコーヒーが飲めるのだ。
彼にコーヒーを出すと黒いエプロンを外し、私は彼の前に座った。

彼ー奥村淳は夫の戦友で、親友でもある。
私たちの結婚式では友人代表として漫才のようなトークをし、大いに会場を沸かせてくれた人物でもある。

鈍色の少し光沢のあるいびつだけど、すごく手になじむコーヒーカップから
香り立つコーヒーを一口すする。
私は猫舌だ。

「聞いたよ。」

彼は単刀直入に切り出した。

何が？とは私は聞かない。

「あいつ、ばかだろう。」

私はうなづかない。

夫からの突然の告白があった日。

あの時も、こうして、向かい合ってコーヒーを飲んでいた。

最近忙しい彼にしては珍しく平日なのに家にいて。

- 最近休日出勤が続いていたから代休なんだ。

最近白髪が増えた髪に手をやって笑っていた。

朝の報道番組がひと段落し、主婦向けの生活情報バラエティーが始まる。

私はそれをボーっと見ながら、普段いない彼がいることに浮き立つ心をかくしていた。

私の向かいに座った彼の真剣なまなざしを感じ、私の心はざわめいた。

―好きな人ができた。

例えるなら、子供が学校での内緒話を打ち明けるように。
彼は声をひそめて私に話した。
その小さな声は、どんな音より大きく響いて、私の世界を崩壊させた。

‐誰を好きになったの？
私はまるで冗談のように返した。
‐正確にはずっと前から好きだった人に、改めて恋をしたんだ。
多分、最初で、最後の恋なんだと思う。
彼ははにかんだ笑顔でそう答えた。
だけど目だけは、真剣だった。獲物を狙う鷹のような目で、いつもよりずっと低い声で。
彼は私に話し始めた。

私はブティックから見える外の景色に目をやった。
色とりどりの日傘と、汗をぬぐう人々。
アスファルトからは湯気のような靄が立つ。
外はうだるように暑いのだろう。
「あいつはね、奥さん。」
奥村は冷たいコーヒーを一気に半分ほど飲みほした。

奥村は私を奥さんという。
結婚当初から、からかうように。
私はそれがとてもうれしかったのだ。

だけど、今はどうしようにもない苦みを感じている。

「あいつは、今戦っているんだよ。
どうしようにもない老いと戦っている。
高柳とよりを戻すなんて、どうかしていると思うんだ。」

私は答えずにコーヒーをもう一口すする。
苦みばかり目立つコーヒーを。

「最近、会社でも色々あってね。
この不景気だ。我々もなかなか厳しくてね。
そんな中、あいつはやっぱりやってくれたよ。

名古屋でのプロジェクトが進んでいるだろう？
だけどまさかその会社に高柳がいるとはね。」

節電で、あまり冷房が利いていない店内で、
彼はしきりに汗を拭いていた。

「高柳はいま、向こうの企画本部の本部長をしているんだ。
女だてらに大したものだよ。だけど、高柳は最低だ。
高柳だって、今の地位を失いたくないはずなんだ。
あいつらは上手にかくしているつもりかもしれないが、周りは気付き始めている。
あたりまえだ。あんなに名古屋に出ずっぱりで、二人でプロジェクトを進めているんだから。」

私は全然気付いていなかった。
夫が出張だと言ったら出張だと信じていた。
だから、朝早くから出先で食べられるように色とりどりのおにぎりを握り、
彼の好きな、厚焼き卵をおいしく焼いたのだ。

「最初で最後の恋とか言って、浮かれているけど。
男っていうのは、男でなくなるのが一番怖いんだよ。
あいつ、今は少しおかしくなっているけど、
必ず奥さんのもとにもどってくると思うんだ。
もう少し。もう少しだけ辛抱してやってくれないか。」

知らなかったのは、私だけ。

夫も、高柳さんも。当事者ではない奥村ですら、知っていた。

高柳さんは、私が入社したころ、会社で唯一の女性総合職だった。
一般事務で、紺色のジャンバースカートの制服の私たちとはちがい、
白いパリッとしたシャツに、タイトスカートを合わせた彼女は輝いて見えた。
華やかな化粧を施し、男性社員にも、上司にもハキハキと話す彼女は
女性の羨望の的であり、そして男性社員からは煙たがられていた。

どこにいても、彼女は輝いていた。

そんな彼女と夫は付き合っていた。

大胆な行動と、派手な功績を上げる彼女。
地味だけど、コンスタントに結果をだす夫。
女武将と付き合うなんて信じられない。
そんな風にからかわれていたけど、夫は幸せそうだった。
そんな彼女は会社を辞める時も派手で大胆だった。
会議の席で、お茶くみを命じられた彼女は、そばにあったお茶を急須ごと社長に差し出したのだ。
自分で酌めと。
烈火のごとく怒りだした社長を横目に、事績に戻ると目にもとまらぬ速さで辞表を書きあげたたきつけた。
こうして彼女は会社を辞め、さっさと留学を決めて日本を飛び出した。
‐あいつはここにいる器じゃないんだよ。
結婚式の準備で打ち合わせに来ていた奥村に夫は言った。
私は、会場で流す音楽を選ぶのに忙しいふりをしていた。
私たちの結婚を色々な人が祝福してくれた。
とくに、奥村は喜んでくれた。
‐お前には奥さんがぴったりだ！
まじめで案外仕事人間のお前には奥さんぐらい世話を焼いてくれる奴じゃないと。
奥さんは、奥さんの鑑だからな！

奥村はそう言って夫をからかった。

だけど、夫はずっと高柳さんを忘れていなかった。

彼は最初で最後の恋をしているという。

じゃあ、まんなかに挟まれた私は？

彼を愛し、彼の子を育み、彼のために生きていた。

私は彼の何だったのだろうか。

口の中のコーヒーが苦い。

メインディッシュとクレソン

今日もぽつんと残されたお弁当が悲しい。

‐君が、ほとんど仕事らしい仕事をしていないのは分かっている。

彼は離婚の条件について説明する。

まるで、プレゼンだ。

彼はどこまでも営業マンだ。

相手がうなづくまで、相手が有利に見える、それでいてギリギリの交渉を続ける。

‐子どもたちはどうするの？

私は一番の心配ごとを話す。

‐加奈はもうすぐ大学卒業だ。就職先も決まっている。心配ないだろう。

最近、大きくはないがよく名前を聞く企業に娘は就職を決めた。

高柳さんと同じ、総合職。

今は女性の総合職は珍しくない。

‐拓は大学も推薦で決まっているし、４年間の学費は全額おれが払う。

もちろん慰謝料として、貯金と家もも君が持っていくといい。

彼はさらにたたみかける。

- あなたはどうするの？

彼は目を輝かせている。

- おれは身一つで大丈夫だ。

名古屋でのプロジェクトを成功させる。それに、もうすぐ退職さ。

退職金で、会社を興してもいいと思っている。

私は思わず出かかった言葉を飲み込んだ。

高柳さんと？

家にいるのが苦しくなった。

今後のことも考えなくてはいけない。

私はパートのシフトを増やした。

働いていると、つらいことを忘れられる。

好きなものに囲まれていると、幸せでいられる。

少し前まで、子供たちと夫がいればそれでよかった。

私はそれを埋めるように、各々に個性を主張する食器たちと、

コーヒーの香りに身をゆだねるようになった。

結婚２５周年を目前として、彼はお弁当を持って行かなくなった。

彼の心が、私から完全に離れたと思った。

完全に冷え切ったお弁当が、私の夕食になった。

「お弁当を作ってみない？」

ブティックのオーナーが突然切り出した。

サバサバとした物言いで、若手の陶芸家に慕われる彼女は
同い年で、１０年前からこのブティックの経営を始めた。

生涯独身宣言をし、恋をし、仕事をし、人生を謳歌している彼女。
彼女は若い。見た目も、考え方も。

昨日までのうだるような暑さから一変し、どんよりとした薄暗い空。

ガラスに映る自分を見つめる。
年をとったと思う。
そこには４５歳になった自分がいた。
誰にも見むきをされない女が。

誰かにお弁当を作りたいと思った。

私は「やります」とはっきり答えた。

２５年前、プロポーズの時ですらうなづくことしかできなかった私
が。

午前中から出勤するようになった私は、両替当番も引き受けること
になった。
紙から硬貨になったお金が、手にづっしりと思い。
働いていることの重みだと思う。

夫や、高柳さんはこれを軽いと思うのだろうか。

そんなバカなことを考えていると、オープンテラスの、フレンチレストランが目に入る。
正確には、レストランにいる、夫と高柳さんを。

高柳さんは相変わらず、派手で、エレガントで、お洒落だった。
大柄のスカーフが彼女には似合っていた。
そして、若かった。私より年上には決して見えなかった。

そして、彼も。

白髪が目立つようになった髪を整えて。
そこには壮年の。自信があふれるビジネスマンである夫がいた。

夫の人生にとって、私は何だったのだろうか。

私はクレソンだと思う。
夫の人生の添え物だった。
彼の子供を産み、育て。親戚づきあいをし、親の介護をした。

彼女はメインディッシュだ。
自分で人生を選び、勝ち取ってきた。

小さなバッグの中の硬貨が重い。

メインディッシュとクレソン（後書き）

一気に更新。
旦那目線の話も同時制作中。
８月中旬に一気に公開する予定。
・・・予定は未定。

厚焼き卵

今日も私は冷えたお弁当を食べる。

「お弁当、すっごく評判がいいわよ！」

ちょっと凝った器に盛り付けた、一日１０食限定のお弁当は、１７００円という価格の割に、よく売れた。

それぞれ個性のあるお弁当箱に何をつめるのか。

私は若い作家たちが作った器が引き立つように。

命を吹き込むようにお弁当を作る。

「それにしても、素敵な色に染めたわね！」

前下がりの真っ黒なボブで、美しい形の頭を強調したオーナーが、

心からの笑顔でほめてくれる。

「真っ黒だったのに、どういった心境？」

私は、人生で初めて髪を染めた。

彼は私のかをみるや否や離婚の話を切り出す。

彼女をいかに愛しているのか、私に淡々と切り出す。

- 君を嫌いになったわけではない。

ただ、タイミングが悪かったんだ。

タイミングが悪かった。

私の心に刺さった。

お金をあるだけ奪い取って、そんな最低な旦那は捨ててやればいい。

心の中の私がささやく。

彼を愛しているんだったら、彼が幸せになれるような人生を選ばせてあげたら？

もう一人の私が語りかける。

だけど、私はこたえる。

彼と別れたくない。

まだ、大好きだから。

そんなある日、食事の支度をする私を見て、夫が固まった。

- ごめん。

離婚の話をして初めて夫が謝罪する。

なにに？

オーブンレンジの銀の縁取りに映った自分にがくぜんとした。

髪の毛が、真っ白になっていた。

- ごめん。

鍋を持ったまま固まった私に、久しぶりに夫が触れた。

私は長年の主婦の行動で、鍋をそっと机の上に置くと、ふらふらと寝室に戻る。

鏡台には、真っ白な髪の、おばあちゃんみたいな私がいた。

目の奥がじーんとあつくなる。

- 好きな人ができた。

私の世界を揺るがしたその日すら流さなかった涙が後を絶たない。

ゆがんだ顔の、真っ白い髪の私が、じっと私を見つめていた。

夫は離婚の話をしなくなった。

私を見ると、何かを言いたそうにして、何も言わない。

私も、何も言わない。

お弁当は今日もぽつんと食卓に忘れられたまま。

「カフェスペースに、軽食を出そうと思うの。」

１０月だというのに、８月のような暑さの日、オーナーに呼び止められた。

「あなた、責任者としてカフェスペースを取り仕切ってくれない？」

１日１０食限定のお弁当は、そのアイディアや、味が評判になり、夕方のワイドショーに取り上げられるとたちまち評判になった。

その時取り上げられた器を作った若手陶芸家が、なんとかという賞を取ったのも大きかった。

「私はブティックの方にもっと力を入れたいし、
実質お弁当もあなたが取り仕切っているのだから、
あなたに任せられないかと思って。」

私は久々にわくわくする心を抑えられなくなった。

夕飯で食べる、夫のためのちょっと量の多いお弁当も。
その日は私の心を打ちのめしはしなかった。

そして、結婚２５周年目を迎えた日、私は初めて夫のお弁当を作るのをやめた。

菓子パン

妻がお弁当を作らなくなった。
今日も味気ない菓子パンを齧り仕事に向かう。
自分は何をしたいのだろう。

大学を卒業し、小さいながらに活気のある商社に入社した。
特段仕事ができるわけではなかったが、教えられたことを堅実に行なう僕を
上司は高く評価してくれ、若いうちから仕事を任せられてきた。

年功序列の会社で、入社3年めの私が主任に抜擢されたのは着実に上げた成果を評価されたからだ。

そんな会社に初めて女性総合職で入社してきたのが、高柳だった。
上司は私に彼女の教育係を命じ、私は始めて部下を持った。

彼女は当時の日本人としては新しい考え方の人間だった。
行動も、言動も派手で、だけど、誰もが彼女の実力を認めていた。

その場に居るだけで、ぱっと場が華やぐ。
私が彼女に恋に落ちたのも自然な成り行きだった。

次々と派手な功績をあげ、彼女は営業企画の主任に抜擢された。
当時は異例のことだった。
彼女は私の部下でなくなり、ようやく同じ土俵に立てるね、と笑った。

彼女は綱渡りのような手法で仕事を進める。
一歩ぐらつけば、あぶない。
それを絶妙なバランスで潜り抜けていくのだ。
しかし、そんな綱渡りのような人生を楽しむ彼女についていけなくなってきたのも事実だった。

彼女が社長にたてつき、辞表を出した時、彼女と私は終わった。
彼女は私よりもキャリアを選んだのだ。
留学に行く彼女を私は止めなかった。

周りから、好奇の目で見られることに疲れ果てた頃、
私を癒してくれたのが妻だった。

優しく、繊細で、私が居ないと生きていけない。
そんな雰囲気に恋に破れた私は癒されたのだ。

バブルがはじけても、堅実な経営をしていた会社は堅実に不況を乗り越えることが出来た。
家庭が出来、私は更に仕事に打ち込み、堅実に成果を出した。

長女が大学に入学し、長男も高校に進学した頃、私は自分の人生をむなしいと感じるようになった。

優しい妻を持ち、特別親と対立することのない、優秀な子供を持つ。
仕事でも、良い部下に恵まれ、責任のあるポジションに居る。

何かの本のような、代わり映えのしない、堅実な人生。

私の人生には冒険が足りなかった。

最初で最後の冒険が、高柳と付き合ったことなのかもしれない。
そんなことを思い始めた頃、サブプライムローン問題から発生したリーマンショックが会社を襲う。
会社の建て直しの大プロジェクトに、私は抜擢された。
そして、大手メーカーの部長職にのし上がった高林と再開したのだ。
５０歳に手が届く年齢の彼女だが、驚くほど若く見えた。
内側からあふれるエネルギー。
若い頃は、いきがっているようにしか見えなかった言動も、
確かな実績から来る自信にあふれ説得力を持つものになっていた。

「お久しぶりね。」
彼女の顔によく似合うルージュがやけに目に付く。
「ずっとあいたかったのよ？」
年を感じさせない彼女の目に吸い込まれる。
「この後、飲みにでも行かない？」
マニキュアをきれいに塗った爪が私の手に絡まる。

「どこがいい。」

私は彼女に、落ちた。

ホテルでは、高校生に戻った、とは言いすぎだが、
妻には感じない興奮に身を任せた。
年相応に男性を経験した彼女の手練手管に負けそうになる。

ギリギリのバランス。
長年感じることの出来なかったスリル。
遠い昔に感じた恋心。
そして、またよみがえる恋心。
最後の恋かもしれない。
年甲斐もなく、と回りに笑われてもいい。
高柳を手に入れたい。
蝶のようにあでやかで、男を翻弄するこの女を手に入れたい。

その夜、私は、はじめて妻をうらぎった。

「部長、今日は菓子パンですか？」
部下の白井がコンビニ袋の中を覗き込む。
妙に居心地が悪かった。
「ああ。最近方々を飛び回っているしね。
妻に迷惑を掛けられないから、買ってくるようにしているんだ。」
部下は無邪気な笑顔で愛妻家ですね～とからかってくる。
白井はいまどきの若者にしては素直で、憎めない性格をしている。

「奥さん、忙しそうですもんね。家のお袋が大ファンなんですよ！」
白井の不可思議な発言に私は固まる。
大ファン？白井のおふくろさんが？
そんな私の疑問に彼はなんと言うこともなく応える。
「またまたぁ～。お袋がいつも買ってる雑誌で今月特集がくまれていましたよ！」
えっと・・・と言いながら、最近会社で全社社員に支給されたスマートパット端末をいじくる。
「ああ、あったこれこれ。これ、部長の奥さんですよね！
年始の挨拶でお会いして以来だけど、髪の毛染められて更にきれいになりましたよね！」
そんな白井のほめ言葉を私は右から左に聞き逃し、
電子画面に大きく写る、妻の笑顔と、味のある器、つい最近まで食べていた、見るからにおいしそうなお弁当を見つめる。彼女の隣には黒髪の、年齢不詳の美女が立ち、その後ろによく日に焼けた、たくましい体つきの男性が立つ。
真っ白い髪で呆然と私を見つめる妻が脳裏によぎる。
わずかに触れた手を振り払い去っていく妻を。
目で人が殺せるのなら、私は妻の肩に手を置く男を殺していただろう。
久々に食べた、菓子パンが胸に焼きつく。

菓子パン（後書き）

夫目線。
ちょっとづつの更新で申し訳ないです。

年寄りのＳＥＸシーンは微妙だけど。
そもそも、年寄りの浮気の話って。。。

だんだんと話しは進む。

あんみつ

新幹線が通る駅だとは思えないほど、那須塩原駅は閑散としていた。
駅を降りてすぐ右側にうどん屋さんがある。
そこで松本と待ち合わせていた。

熱いお茶と、あんみつを頼んでから、那須についたことをメールする。
泣いているのか笑っているのかわからない、微妙などんよりとした天気が、
私の今の心模様をあらわしているようだ。

自分のカフェを作り上げるという仕事は、思った以上に私を支えていた。
昔のように、ただ家にこもっていたのなら、私の精神は崩壊いていたと思う。

なによりも、経済的に自立できているという事実が、
思った以上に自分の心に安定をもたらしていた。

万が一夫に本当に捨てられても、食べるのには困らない。

もっとも、離婚に際して夫はこちらが引き腰になるほどの金額を提示してきているが。

どうしたのだろうと思う。
奥村の言うとおり、夫はおかしくなっているのかもしれない。
昔の夫なら、このような交渉の仕方はしなかった。
夫は慎重にこちらの顔色をうかがい、自分が優位に立っていると思

わせ
交渉をスマートにまとめてきていた。
北風と太陽でいうところの太陽だ。

今の夫は、完全に北風になってしまっている。
金に物を言わせ、強引に何かを迫るなど、夫のやり方ではないのだ。
そして、私はそのやり方に反発し、離婚を拒否している。

私は夫を愛している。

ほんとうに？

北風に反発する旅人のように、かたくなになっているだけなのかもしれない。

あんこの優しい甘みが口の中に広がる。

おいしいものは心を癒す。
夫を癒したくて、元気にしたくて料理を作ってきた。
その特技が、今私に自信を与えてくれている。
ただの主婦が唯一誇れることだ。

若手の陶芸家たちの作った器でお弁当を作る取り組みは、
夕飯時のニュースで流れると、瞬く間に大反響を呼んだ。

陶芸家たちには５０個作品を納品してもらう。
私はそれが引き立つようなメニューを考える。
１日限定１０個のお弁当だが、若手の陶芸家を売り出すいい宣伝になった。

今後もこの取り組みは続けていくが、カフェをリニューアルオープンするにあたって、
どうしても器が足りなくなった。

若手たちの器も週替わりで使っていくが、
メインとなる器を、オーナーが発掘した陶芸家に依頼することになった。

脱サラして陶芸家になった彼は泣かず飛ばずのところをオーナーに見出された。
ブティックに並べるようになると、瞬く間に売れるようになった。
いくつも賞をとり、その作品は高値で売買されている。
なんでも、おねぇ系で独特な個性を持つ華道家が作品に使用したところ人気が出たようだ。
それがこれから待ち合わせをする松本だった。

「こんにちは」
日に焼けた、Tシャツにチノパンというラフな格好の男が話かけてきた。
４０歳半ばだと聞いていたが、３０代でも十分通りそうなほど若々しい。
夫もそうだが、年をとって見えないというのは本当にうらやましい。
もっとも、私も髪を染めてから娘に若くなったと誉められた。
今まであまり手を掛けてこなかったが、
しっかりとカットしてもらったからかもしれない。

「はじめまして。」
私はあわてて席を立つ。
「座ってください。あ、僕にもあんみつ一つ。」
以外に甘党なのかもしれない。
甘いものを食べるとすぐに胸やけをする夫と比べて、思わず笑みがこぼれる。
「だいの甘党なんです。お恥ずかしい。」
そう頭をかきながら照れる彼は本当にかわいいと思う。
「わざわざお越しいただいてすみません。本当は僕が東京へ行けばいいんでしょうが、
どうも東京が苦手でしてね。東京の駅は迷路みたいでしょう。妻にもよく馬鹿にされたものです。」
熱いお茶が彼の前に置かれる。
「いいえ、私も新宿駅とかはよく迷います。
行くたびに、駅の構内が変わっているんですもの。」
熱いお茶と格闘している彼に笑みがこぼれる。
私も猫舌なのだ。ここのお茶は熱すぎる。
「那須はいいところですね。
実は初めて来たんですけど、涼しくてびっくりしました。奥様も？」
幾分さめたお茶をすすりながら松本に尋ねる。
「いえ。サラリーマン辞めた時に妻とは別れましたから。

よくできた妻だったんですが、うだつが上がらない夫にうんざりしたんでしょうね。
そのうえ脱サラだ。子供たちとかローンはどうするんだってね。」
彼は楽しそうに明るく話す。
なるほど、確かに彼の奥さんの気持ちはわかる。
夫はまじめ、誠実を絵に描いた男だったため、経済的な心配は一切なかった。
まじめ、誠実に関しては今になっては疑問符だらけだが。
「まあ、なんとか陶芸で食っていけるようにはなったんですがね、子供も妻も付いてきてはくれませんでした。あたりまえですけどね。」
目の前に置かれたあんみつがすごい勢いでなくなっていく。
「いやね、テレビをつけていたら、おいしそうなお弁当特集をやっているじゃないですか。
アー食べたいなぁなんて思っていたら、次の映像であなたが作ったお弁当に心をがっつりつかまれました。」
脱サラして、田舎でこもりっきりで作品を作っていると聞いたので、どんな頑固な変わり者だろうと思ったら、ずいぶん人懐っこい人だった。
なんて答えていいのかわからず、曖昧にありがとうございますと笑う。
「あ、お世辞じゃないですよ。本当に、器が生きているみたいだった。

最高に輝いて見えたんですよ。」
スプーンを握りしめて熱く語る。
コメントはプロの陶芸家だが、微妙に間抜けだ。

「どこの弁当やかと思ったらオーナーさんの店なんだもの。
思わず電話をかけたわけですよ。
そしたらカフェ計画のことを教えてくれてねぇ。
是非僕の器を使ってほしいってお願いしたんです。」

オーナーはそんなに前から、カフェを計画していたのかと驚く。
おなかいっぱいで入らなかったあんみつを彼がちらちらとみている。
残りものだし失礼かなと思いながらも食べます？と聞くと
全開の笑顔で自分の空になった器と取り換える。

彼の車にのり閑散とした駅付近を離れると
数々の美術館や博物館の看板が見えてくる。
大きな川の橋を渡り、チーズミュージアムを通り越し、
大麻博物館なる物々しい看板が見えてきたあたりで左折する。
小さなコテージや、土産物店が立ち並ぶ賑やかな通りをすぎると
ひっそりとした森の中に入る。
コンクリートで舗装されていない道を進むとかわいらしいロッジが
見えてくる。

「ここがアトリエです。」

なるほど、裏に小さな煙突がついた建物が見える。
あそこが窯なのかもしれない。

アトリエに入ると色々な器が並んでいる。
適当に置いてあるようにみえて、そこでないといけないと思われるような絶妙な配置。

ちょうどいい大きさのまあるい器を見つける。
これにサラダを盛り付けたらちょうどいいに間違いない。

「気に入りました？」

彼がお盆の上に鈍色のカップを乗せて持ってくる。

「あ！それ！」

そう、いつも私が愛用している、鈍色の、光沢のあるいびつな形のそれだった。

「ああ、オーナーも使ってくれているからか。
そうですよ。あの店のオーナーのカップは僕が作ったんです。」

カップなのに、つめたい。
アイスコーヒーを入れてきてくれたようだ。

「ペアだったので、もうひとつは私が使っているんです。
すごく手になじんで、愛用しています。」

ミルクを入れながら答えると彼がうれしそうに笑う。

「うれしいですねぇ。じゃあ、どういうイメージの器がいいか教えてくれますか？」

商談が始まる。

値段は材料代だけでいいと言われたが、そうもいかないだろう。

だが、こちらが欲しい器の形と数を具体的に話していく。

こうして那須の出張が終わる。

「あ、カフェのオープンの日は僕も東京に行きますよ。」

帰りの車でハンドルを切りながら彼は話す。

「なんだか、雑誌とかの取材があるから来いってオーナーにいわれましてね。

僕を発掘してくれたのはあの人なんで、頭が上がらないんですよ。

久しぶりに東京に行きます。オープン楽しみにしているんで。」

言葉通り、カフェのオープンは華やかなものになった。

おねぇ系の華道家が、松本が作った器だということで遊びに来てくれ、

ついでに目に付いた花器に花を生けてくれたのだ。

これには私はびっくりし、オーナーは大喜びだった。

雑誌の記者にたのまれて、カフェの名物となったお弁当と

オーナー、そして松本に囲まれ写真を撮る。

緊張して顔をこわばらせていると松本がそっと肩をたたく。

「顔が、僕のいびつな器みたいになってますよ」

とジョークを言うかれに思わず声をあげて笑ってしまった。

２５年、夫と生きてきた。

老後も当然夫と二人で、穏やかに過ごしていくものだと思っていた。

たくさんの笑顔に囲まれ、私にもこんな未来があったのかと。

そして、これからももっといろいろな選択肢と未来があることを感じた。

もう４５歳だ。でも、まだ４５歳なのだ。

夫は今日は何を食べているのだろう。

おいしいと思えるものを食べていてほしいと思う。

あんみつ（後書き）

後書き　最初、軽井沢にしようと思ったけど、
男の名前を松本に決めてたから長野はまずかろうと笑

急きょ那須塩原に。

物語は中盤。
今回、描写が多くてちょっとダレたかも。
あんまり余計な事書きたくなかった。

進まない物語は好きじゃない。

がっと書きあげます。が、月初の給料計算でてんてこ舞い。

ＵＰするのに時間がかかるかも。
会社で更新するわけにいかないしね。。。

煮物

夫は何も言ってこない。
私の髪が白くなったあの日から。
何かを言いたげではあるが何も言わない。

私は夫に普段通りに接する。
おはようとあいさつし、お帰りと迎える。
そしていってらっしゃいと送り出す。
おっとの浮気相手がいる職場に。

変わったのは、私が夫にお弁当を作らなくなったことだけ。

カフェは予想外に評判になった。
ただ、客層が上品なためか、さほどうるさくなく落ち着く雰囲気は保っている。

今までは作品を購入に来る人が少しコーヒーを飲んで行くだけだったが、
いつの間にかカフェを目当てで来て、器に興味を持ち買っていくというのが定番になった。

私もオープン当初は忙しさに嫌になってしまったが、
オーナーが調理学校に通う学生をアルバイトに雇ったため
今はメニューを考えたり、盛り付けを楽しんだりする余裕がある。

調理学校に通う学生にも積極的にアイディアを出してもらっている。
そうこうしているうちに、実践に興味を持った学校側から、

学生をかなり安い値段で派遣してもらえるようになった。
その取り組みがさらに話題になり、と好循環をうんでいる。
私もひさびさに若い子たちとアイディアを出し合うことに喜びを感じている。
昔は娘とよくこうしていたが、残り少ない大学生活を謳歌する娘とはめっきり話をしなくなった。
もっとも、娘は敏感に親のいさかいに気が付いているのかもしれないが。
息子は暢気なもので、受験から解放されたこともあり、遊び歩いている。

夫とも、休日はよく料理をした。
一緒に御重にお弁当をつめ、近所の公園でピクニックをした。
ご飯を食べた後は、日帰りの入浴施設にで汗を流すのだ。
1年前だったろうか。
新プロジェクトが始まり事業部長になったとうれしそうに夫が話した。
私は夫と一緒に喜んで、心ばかりのごちそうを用意した。
コンスタントに成果を出していたが、派手な功績のない夫は昇進の際によく悔しい思いをしたものだった。
それでも、夫は笑っていたのだが。
プロジェクトが始まり夫の帰りが遅くなった。

だが生き生きした表情だった。
普段と違う石鹸の香りに気がついたが、
体臭が気になるようになったから石鹸の香りがする香水を使ってると聞き、
そんなものかと信じ込んだ。

- 体臭が気になるなんて、あなたも年ね。
私も気をつけなきゃいけないかも。

自分の体のにおいをかぐふりをすると、夫は何とも言えない顔をした。
気に障ることを言ってしまったかもしれないと思ったが、
ご飯を食べ始めた夫にそれ以上何も言えなかった。

夫の出張が増えた。
名古屋での商談、中国での商談。
忙しくなる夫に、いつでも食べれるように工夫したおにぎりを作った。
パプリカのピクルスを持たせたり、野菜不足にならないように気を配った。

そのお弁当を夫は食べていなかったのかもしれない。
最近はそう思う。

好きな人ができたという告白から、夫は家にいつかなくなった。
そして、帰ってくるたびに離婚を切り出してくるようになった。
娘が寝てしまった深夜に帰ってきて、離婚の話をするのだ。
時には一晩中帰ってこなかった。

朝方帰ってきたことに気が付き、迎えようと寝室から出る。
ちょうどシャワーを浴び終えた夫がバスルームから出てきたとき、
私の心臓は鷲掴みにされたかのように悲鳴を上げた。
夫の胸元にあるキスマーク。
私がつけたものではないそれが私の心をひっかく。
夫はかくすでもなく、ただいま。という。
そして、こういうのだ。
- 離婚の決心をしてくれたかい？
彼女が私と早く一緒になりたいと言っている。
私たちは若くない。時間を無駄にしたくないんだよ。
私は、おかえりを言うのを忘れて夫が出たばかりのバスルームに入る。
シャワーを全開にして声を出す。
でも、涙は出ない。
しゃくりあげるような声が出るだけで、涙は出ないのだ。
私の心はしんじゃったのかもしれない。
２５年間、私のすべてだった夫が私のものではなくなってしまった。
夫のために暮らしやすい家を整えた。
夫のために、夫の両親の介護をした。
夫のために、夫に似たかわいい子供を2人育て、
夫のために、栄養に気をつけた食事を作った。

夫のために、夫のために、夫のために。

服ごとびしょぬれになり、気持ち悪くなった。
廊下が濡れること身気にしないで寝室に戻った。

寝室でびしょぬれのパジャマを脱ぐ。
ベットマットが濡れると洗濯物がしんどくなる。
長年の主婦の血が、それだけはＮＧを出した。

どうしようにもなく、私は主婦なのだ。

そのまま倒れ込むように眠った。

朝起きると、髪が白くなっていた。

夫が家に帰ってくる。
私はいつも通り、おかえりを言う。
夫は私を見ないで、ただいまと言う。

「ご飯食べる？」
私は夫に作った煮物をレンジに入れながら質問する。

「食べてきた。いらない。」
そう答えが返ってくることを知っていながら。

いつもはそう言って寝室に向かってしまう夫だが、
今日は何かを言いたげに私を見ている。

久しぶりに離婚の話し合いをするのかもしれない。

唇をぐっと噛み、笑顔を作るとどうしたの？と夫に問いかける。
夫は何かをしばらくためらった後、ついに決意したようにこちらを向く。

「雑誌。見た。」

単語だけの会話。

「雑誌？ああ、カフェオープンの。かわいく写ってた？」
４５歳のおばさんにかわいいも何も無かろうと思ったが、
あえて冗談のように返した。
そう、昔電話で楽しんだ軽口のように。

「楽しそうに見えたよ。」

夫はそれだけ言うと寝室に行ってしまった。

楽しそうに見えたよ。

だから、私のままごとのような結婚生活から解放してくれ。

私には、そう聞こえた。

煮物（後書き）

さっき投稿したのは、本当に話が進まなかったから
もう一話一緒に投稿。

過去と今と行ったり来たりで分かりにくいなと思う。
でもようやく夫ともカギカッコで会話できるようになりましたとさ。

ずぅっとハイフンで会話してたから。

さて、これからラストに向かって走りますよぉ。

次の更新は土曜日か日曜日に。。。とか言って明日投稿しちゃうかも。

ラーメン

「私はBランチだって言ったじゃない！」

混雑がピークに達したカフェで女性の甲高い声が響く。

ざわついていたフロアが一瞬にして静かになり、
そのテーブルに視線が集まった。

私はその視線を背中に受けながら、必死に頭を下げる。

「申し訳ございません。すぐにお取り換えいたします。」

イライラしたような女性は机を細い指でトントンと叩きながら、
早く持ってきて！とため息をつきながら言う。

私はきれいに盛り付けた皿を持って厨房に入り、
大急ぎでBランチを作るように指示をする。

青くなった顔の学生が首を振る。
悪い時には悪いことが重なるものだ。

「さっき出たので、Bランチのターメリックライスが切れてしまったんです。」
厨房が静まり返る。

今から作ったとして、ターメリックライスが炊きあがるのは45分後。
ましてや、間違えたAランチの提供で、時間をいただいてしまって

いる。

「お客様に話してくる。みんなは各自の作業に戻って。」

私はランチではセットにつけていないデザートのプリンを持ってお客様の席に戻る。

「お待たせして大変申し訳ございません。」

私は手にしたプリンをお客様に差し出す。

手帳を手にした彼女はイライラした様子で私を見る。

「当店自慢のプリンです。お待たせしてしまっているお詫びなので、是非お召し上がりください。」

そう切り出すと、「お気づかいありがとう。とにかく、次の予定があるから早く持ってきてね。」とまた視線を手帳に戻してしまう。

私は意を決してお客様にお話しする。

「お客様、実はBランチのドリアに入れるターメリックライスが切れてしまいまして、

バターライスにしたものならすぐにお出しすることができます。

もしくは他のお品でしたら大至急おつくりできるのですが。」

とメニューを差し出す。

お客様は馬鹿にした顔で手帳をパタンと閉めると「責任者を呼んできて。」と一言言う。

オーナーは今日はいない。仕入れに出てしまっている。

ブティックの責任者が心配そうにこちらを見ている。

私がカフェスペースの責任者なのだ。

「私が、こちらの責任者をしております。」

私がそう話すと、女の人はふーっと長い息を吐く。

先程の大きなどなり声ではなく「こんな人が責任者じゃ全然駄目ね。仕事してないもの。」

とつぶやくように一言言うと、プリンには手を付けずに鞄をもって出て行ってしまった。

コンナ人ガ責任者ジャ全然駄目ネ。仕事シテナイモノ

どんなどなり声より、つぶやかれた声が私の心に響いた。

フロアは相変わらず混雑していた。

とぼとぼと私は自宅に帰る。

仕事がうまくいっていることが今の私の唯一の救いだったのに、全否定された気分になった。

仕事を投げ出したいとすら思ったが、なんとか一日を乗り切った。

帰る途中、滅多に入らないコンビニでカップラーメンを買う。

今日は何も作る気が起きない。
どうせ夫は今日も私の料理を食べないだろう。
娘は旅行中だし、息子は晩御飯がカップラーメンなら大喜びだろう。
料理が趣味だった私には初めての経験だった。
息子用のメガ盛り味噌チャーシューメンをキッチンカウンターにしまい
やかんでお湯を沸かし始める。
私はふたに記載されている通りにカヤクと粉末スープを取り出し、カヤクだけを麺の上に乗せる。
沸騰したお湯をきっちり分量通りに入れるとふたの上に後入れの白い油を乗せてきっちり3分計り始める。
そして、主人と初めてラーメンを食べた日を思い出していた。

その日は月末処理に追われた一日だった。
コンピューターに伝票を打ち込んでいく単純作業だが神経がいる仕事だった。
ところがそんな日に限って電話がよくなる。
電話を取ると聞いたことがない社名の会社の社長秘書からの電話だった。
―申し訳ございません。有川は只今外出しておりまして、

私が要件をお伺いできればと思うのですが。

きまりきった定番文句をきっちり答える。

―さようですか。それでは有川主任に伝言をお願いいたします。
本日１６：００からお約束頂いていた打ち合わせですが、社長に外せない用事が出来まして
時間帯を１４：００にずらして頂きたいんですが。

伝票から手が離せない。メモを取りたいのだが。
有川主任のホワイトボードの予定をみると、今日は午前中で出先から戻るようだった。

―畏まりました。本日１４：００からですね。
有川にお伝えいたします。
お電話ありがとうございました。

有川主任に伝えようと受話器を取り上げた瞬間、また電話が鳴る。

他のメンバーも受話器を持ったり、鬼のような形相で伝票を入力していたり。
私はため息をつくとその電話を取った。

―お電話ありがとうございます。下川がお受けいたします。

そして、すっかり有川主任のことを忘れてしまったのだ。

―徳田商事からの電話を取ったのは誰だい？

いつも優しい主任が押し殺した声で営業管理課の事務に聞く。
―いえ、今日は徳田商事様からお電話はなかったようですが。
営業管理課の事務長が誰か取った？という顔でフロアを見渡す。
私は背中に冷たい汗が流れるのを感じた。
有川主任に伝えるのを忘れていた。
静まりかえったフロアで私は震える手を挙げた。
―申し訳ありません。私です。

いつも優しく、電話では冗談を繰り返す有川主任がつめたい瞳でこちらを見つめた。
皆の視線が痛く、泣きたくなった。
徳田商事はこれから手を組もうと考えている企業様だった。
約束のすっぽかしは会社としてあってはならないことで、
有川主任は謝罪のため方々に出向かなくてはならなくなった。

私はこってりと営業管理課の事務主任に絞り上げられた。
猛省していた私だが、反発心もムクムクと湧き上がってきた。
そもそも、営業管理課にかかってきた電話なんだから、
そっちが取ればいいじゃないか。

いつも営業管理課が電話を取らないから、経理課の私が取っているのに。

今日だって、確かに電話に出ている人は仕方がなかったが、伝票を打つのはこっちも一緒だ。伝票を打っている人が出れば、会社名だって一致するし、間違えがなかったはずなのだ。

なんで親切心で電話を取った私が怒られなくてはならないのか。

１９歳だった。

それまで、商業高校をでて、特別叱られることなく経理事務の仕事をしてきた。

初めてぶつかった壁に、心が折れそうになっていた。

電話に出たくない。

有川主任と話すのが楽しくて積極的に出ていた電話を取りたくないと感じた。

有川主任とだって話がはずまなくなったに違いないし。

ご飯大好きな私は東京に出てきて初めて何も食べないで眠ってしまった。

どんよりとした気分で朝を迎えた。

反発心も沸いたが、今回はどう考えても私が悪かった。

社会人として、会社から給料をもらっている以上、責任を持って仕

事をしなければいけなかった。

お弁当を作る気分にはなれなくて、いつもより早めに会社に向かう。
一番乗りだと思った会社にはすでに有川主任がいた。

彼は営業鞄をもって事務所を出るところだった。

おはよう、と通り過ぎようとする主任をとっさに呼び止めた。

―昨日は申し訳ございませんでした。
伝達ミスなんて、許されるものではないですが。
以後このようなミスは絶対にしません！

彼は驚いたようにこちらを見つめる。

―私ができることでしたらなんでもしますので、
先方にも私がお詫びに行きますので。

言葉が思ったように出てこない。

涙を流さないよう、目がしらにぐっと力を込める。

―君は君の仕事をきちんとしてくれればそれでいいよ。
先方には私のほうからきっちりと謝る。
それにこんなことで交渉が決裂するような営業活動はしていないよ。

彼はそう言って車に乗り込んだ。

自分の仕事をする。
私は自席に着くとコンピュータを立ち上げる。
昨日半端に入力してしまった伝票を入力しなおすために。

もうすぐお昼休憩という時間に電話が鳴る。
私は誰よりも早く電話を取った。
―お電話ありがとうございます。下川がお受けいたします。
ミスを取り返すには、行動するしかないのだから。

ピピピと、キッチンタイマーが鳴り、ぼおっとしていたことに初めて気がついた。

ふたの上で、透明な液体になった油をどけて、粉末スープを入れる。
少しかき混ぜてから、油をこそぐように入れた。

いい香りが部屋いっぱいに広がる。

私はあまり食べさせたくないのだが、子供たちはカップラーメンが大好きだ。
誕生日のごちそうは何がいいと聞いたときに、息子にカップラーメンと答えられた時には地味に落ち込んだ。
普段手作りの料理しか食べさせてないから、子供たちにはごちそう

に感じるんだよと夫がフォローしてくれる。

でも、ごちそうにカップラーメンを上げるなんて、普段どんなに酷いものを食べさせているのだろうと息子の先生や、友達の保護者に思われたに違いない。私は酷く恥ずかしかった。

ラーメンを一口すする。

今のラーメンは麺も具も工夫されていておいしいのだと思った。これは息子がハマるのもうなづける。

あの日主人と初めて食べたのも醤油ラーメンだった。

―お電話ありがとうございます。下川がお受けいたします。

いつもより、丁寧に明るく電話に出る。

―君の電話対応はいつも本当に気持ちが良いね。

有川主任の低くて優しい声。

私は次の句が継げなくなる。

―徳田商事との取引が無事終わったよ。

ところで、もうすぐ昼休みだろう。これから少し出てこれる？

有川主任と待ち合わせたのは駅前の公園だった。

彼は営業鞄をもって歩いてこちらに向かってくる。

―車を置いてきたら時間がかかってしまった。待たせて悪かったね。
お昼時を少し過ぎた時間だが人が忙しそうに行きかっている。
―ご飯でも食べないか？あ、君今日もお弁当？
私は首を横に振る。
―よかった。いつもおいしそうなお弁当だからね。
お昼休みに誘うのも気が引けたんだが。
彼が歩き始めたので、私も後を追う。
―どこか食べたいところある？
そう言われても、いつもお弁当派の私は本当にお店をあまり知らない。
―有川主任がお勧めのお店で。
そう答えて連れてこられたのが、裏路地にある、失礼だが汚いラーメン屋だった。
すぐにカウンターの奥に通される。
―なににする？
ラーメン屋になんか入ったことがなかった私は有川主任と一緒のと答える。
彼は醤油ラーメン２つね。とおじさんに伝える。

一つは大盛りで野菜増しで。とも。

何を話していいのか分からない。
ちょっと汚いプラスチックに入ったお水を一口飲む。

―いつも、君の電話対応すごく評判がいいんだよ。
唐突に彼は切り出した。

―電話取るのも早いし。感じもすごくいいし。

彼はグラスに継がれた水を一気に飲み干し、
またカウンターの上のポットから自分でなみなみと注ぐ。

―今回、君はあってはいけないミスをしたけど、
でも、そういうミスをするのは人一倍電話を取っているからだ。

ミスを指摘されて、縮こまった私に彼は優しく笑う。

はいよーと、おじさんが私たちの前にラーメンを出す。

ちょっとだけ緩んでしまった涙腺はラーメンの湯気がそっと隠してくれた。

―おいしい？

彼がうれしそうに私に聞く。

私はちょっと考えてから答える。

―あついです。
私は猫舌なのだ。

私はそれから1年後には会社を辞めてしまった。
主婦として一生懸命彼に尽くしたつもりだった。
だけど思うのだ。
彼も私たち家族に必死に尽くしてくれていた。
家事をすることと、仕事をすること。
比較はできない。

でも、彼はこういった苦労を一手に引き受けてきてくれた。
バブルが崩壊して、景気が悪くなる中
彼は私たち家族のため、どれだけ悔しい思いをして会社に社会に、
頭を下げてきたのだろう。
平和は維持をするのが難しいのだ。
壊すのは簡単なのに。

麺を食べ終わったころ、玄関が開く音がする。
息子が帰ってきたのだろうか。
玄関に顔を出す。
いつもよりずっと早く帰ってきた夫がそこにいた。

「おかえりなさい。」
出迎えた私に「ただいま」と切り返す。
部屋中に充満した匂い。
テーブルの上のカップラーメンに彼の視線が移る。
「ごめんなさい、今日は何も作ってなくて。
あなた、何か食べる？すぐに買い物にいくけど。」
彼は鞄をソファーに置くとこちらに戻ってくる。
「いや、いらないよ。」
いつもの答え。
彼が作ってと言ったら、私はなんでも作るのに。
そう。といって片づけを始める私を彼はじっと見ている。
この前もこんなことがあった。
彼は何かを言いたそうだけど、何も言わない。
離婚を切り出すタイミングを計っているのか。それとも。
「なにかあった？」
夫の言葉に片付けの手を止める。
「なにかって？」
どう答えていいのかわからなくて、私はオウム返しにする。
「いや、何もないならいいんだ。」
彼はネクタイをほどきながら廊下に向かう。

なにかあったか？
あったに決まっているじゃない。

今日はお客様がたくさんきて、すごく疲れたのよ。
それに、アルバイトの子が注文のミスをしたのに、私がすっごく嫌な言葉で怒られたのよ。
お気に入りの器が一つ割れてしまったわ。

子供は遊びまわってばっかりで、最近家にいつかないし。

それに、大好きな夫は堂々と浮気をしているわ。

それに、それに、それに。

夫に投げかけたい言葉がぶわっと浮き上がる。
目の奥が熱くなってくる。

でも、そんな言葉を夫にぶつけることはなかった。
夫はいつでも仕事の愚痴を言わなかった。
私の家事にも文句を言わなかった。

喧嘩もたくさんしたけど、夫は私を責めたりはしなかった。

私は夫のために生きてきたつもりになっていた。
夫も私のために生きてきてくれたのに。

夫は最初で最後の恋をしている。
真ん中の私は？

私は、守られてきた。そして大切に愛されてきたのだ。

夫が他の人に恋をした。
それでもいいと思った。
夫が幸せなら、私はそれでいい。

私は唇をかみしめると給湯器のお湯を出して、
いつもより、あわあわにしたスポンジで勢いよく箸を洗う。

給湯器の湯気が、私の涙をかくしてくれることを祈って。

ラーメン（後書き）

主人公と旦那の名前が初めて出ました。
こんなにたってから初めてって。。。
しかも上の名前だけ。

実は下の名前を出さないのは意図的に。

筍ごはん

「離婚しよう。」
出張から帰ってきた夫が、唐突に切り出した。

もう、私の顔色を窺うような話し方ではなかった。
すべての迷いが晴れた顔。
ここしばらく、離婚の話は出ていなくて、本当に唐突だった。
だが、最初、夫から最後の恋を宣言されたあの日のようにこちらの出方を窺っていない。
夫と、高柳さんのほうで何か動きがあったのかもしれない。

私たち夫婦はもう、駄目なんだと思った。

離婚の話が平行線を描いたまま、筍がおいしい季節がまた廻ってきた。
夫は相変わらず、出張や休日出勤が続いている。
もっとも本当に仕事なのかはもう、分からなくなってしまったけど。

夫が離婚の話を切り出してきたら、別れようと、決心はできていた。

子供たちも、私たち夫婦の微妙な緊張感を感じ取っているようだ。
４月、真新しいリクルートスーツを着た娘は、那須事務所に配属が決まり、
営業活動のイロハや会社の概要について学んでいる。
新幹線で７０分の距離だが仕事が忙しいことを理由に、配属されて

から一度も家に帰ってきてはいなかった。
この春大学に進学した息子も、バイトに、サークル活動にと忙しくしているようで
家には寄り付かなくなった。
私は手元の筍ごはんを切るようにかき混ぜながら答えた。

「わかった。」

奥村が再び店を訪ねてきたのは、その日の夕方近い時間だった。
5月とは思えないほど、外は暑い。
今年も、暑い夏になるのかもしれない。
奥村はやはりしきりにハンカチで汗をぬぐっていた。

そんな彼にアイスコーヒーを出すと、一気に半分飲み干した。
私はアルバイトの学生たちに店を任せ奥村の前に腰かける。

あの日のように。

「奥さん、あいつを見捨てないでやってください。」
彼はやはり単刀直入に切り出した。
「あいつは、きっとあなたのもとに戻ってきます。
奥さんにはつらい思いをさせていますが、もう少しだけ、あいつに時間をやってください。」
私はカフェモカを一口飲み、答えた。
「奥村さん。私は一年近く、彼を見守って来ました。
何かの気の迷いなんだと夫を信じて。
彼が出張に出かけるたびに、泣いて、彼が深夜に帰ってくる度に、泣いていたんです。

髪の毛も、白髪になりました。彼が離婚を切り出したら受け止めようと決めていたんです。」
私は奥村のまっすぐな視線から目をそらして答える。

まだ、自分の判断に迷いがあるのだろうか。
夫にこれだけ手ひどく裏切られて、どこまで私は夫に甘いのだろう。

「一年待ったのなら、あと少しだけ待ってあげてください。
あいつが最近行っている出張は本当にただの出張です。
今、あいつは仕事で正念場を迎えています。
社外秘の情報なので、これ以上詳しくは教えられませんが、
天地にかけて、あいつはいま仕事に一直線に取り組んでいます。」
私は、その言葉カッときた。
夫にぶつけられない怒りを奥村にぶつける。
「だったら、だったらなんで離婚を切り出してくるんです。
最近、夫はそういった話題は出してきていませんでした。
もしかしたら、私とやり直したくって、それが言い出せないかもしれないと
私のほうから積極的に話しかけ彼の分のご飯もずっと作ってきたんです。
彼が、私のご飯を食べたら、この騒動を無かったことにしようと。
それなのに、それなのに。」
私は下唇を思わず噛む。
そうしていないと、泣いてしまいそうだったから。

職場で泣くわけにはいかない。

アルバイトの学生たちは気を利かせているのか、
カウンターのグラスを拭いてこちらを見ないようにしていた。

「奥さん、繁盛しているようですね。」
突然、奥村が話を変える。
「男ってやつは、妙なプライドを持っているんですよ。
いつまでも男でいたい。仕事で成功していたい。
妻に愛されていたい。ってね。」
私は話題についていけず、ポカンとする。
「あいつはまじめだった。
適当に遊べる奴だったら、奥さんにこんなつらい思いをさせないで
済んだのにな。
あいつも５０だ。最後の冒険のつもりだったんだろう。
奥さん、あとちょっとだけ、待っていてやってくれないかな。
奥さんとあいつはさ、俺の理想の夫婦だったんだよ。」

奥村の話は全く解せなかった。
解せなかったが、不思議と心が穏やかになってきた。
夫は、多分私に帰りたがっている。
不思議な確信だった。

夫と奥村がどういう話をしたのか、分からない。
なんで奥村が私に離婚を思いとどまらせようとしているのかもわか
らない。

でも、１年待った。
ただ、たった１年だ。
２５年を終わらせるのに、１年はあまりにも短い。
私は今夜夫とどんな会話をしていいのか、分からなくなった。

その日の夜、私は夫のために、丹精込めて夕食を作った。

いつもいらないといわれてしまう夕食。
今回も明日の私の朝食になるのかもしれない。
それでもいいと思った。
筍ご飯をおにぎりにする。
出汁巻き卵と、いんげんの胡麻よごし。
筍のお吸い物に、筍とフキと鶏肉の煮物にラップをする。
いつもは夫が帰ってくるのを待つが、
私はリビングの電気を消して、寝室に戻った。
きっと眠れないだろうと思ったけど、睡魔はすぐにやってきたようだった。
物音にふっと眼を覚まし、時計を見ると深夜1時を指していた。
夫が帰ってきたようだった。
このまま、寝てしまおうかと思ったが、
長年の主婦の血が、それをさせてくれなかった。
私は、カーディガンを半袖のパジャマに羽織ると、そっと階段を下りる。
「・・・っ」
鼻をすするような。
泣くのを我慢するような苦しそうな声が聞こえる。
私はびっくりしてリビングの扉に手をかける。
そこでガラス越しに見た夫の姿に驚いた。

夫は私の筍ごはんのおにぎりを食べていた。
左手におにぎりを。右手に箸を持って何日もご飯を食べていなかったかのようにかきこんでいる。
ときどき、鼻をすすりながら。
ときどき、肩を震わせながら。
おにぎりを食べていた。

夫の戦いが終わったのだと理解できた。
何かが、夫の中で完結したのだ。

昔だったら、こんな夫の姿を見たら飛び出して抱きしめていたのかもしれない。
何も分からずに、大丈夫、あなたを信じている。あなたが正義だと、無神経に慰めていたのだろう。

私は足音をたてないようにリビングのドアから離れる。
もう一度、リビングを振り返る。

そこには、年相応に老けこんだ、夫がいた。

私は夫がいとしいと思う。

階段を上り、ベッドにもぐりこむ。

明日のお弁当のおかずは何にしようと考えながら。

筍ごはん（後書き）

夫が筍ごはんを食べながら泣いているシーンはすごく書きたかった。
もっときちんと伝えたかった。
自分の文章力の無さが嫌になる。

漢数字と算用数字が入り混じっているけど、する―。
接続語が変なのは、わざと。
誤字脱字があるのは、、、すみません。。。

ハンバーガー

娘が新入社員として那須に配属された。
真新しいスーツに身を包み、目をキラキラさせている娘を見て、
妻の若いころを思い出した。

今の娘の年齢より、ずっと若く、私の妻になった。
うちの両親が、結婚式に口出ししても、嫌がることなく
どうすれば皆に喜んでもらえるかを考えていた。

どうすれば、俺の顔が立つのか、俺の両親が満足するのかを考えてくれていた。
花嫁が主役の結婚式で、妻の意見は何一つ通らなかった。
それでも、私の妻に慣れて幸せですと、かわいい笑顔を見せてくれた。

この笑顔を守るために、一生をささげようと誓った。
誓ったはずなのに。
俺は社長室の前で自嘲する。

今となっては、妻の泣き顔を作っているのが私なのだから。

高柳との体の関係は自分を若くしてくれた。
４０を過ぎたころから、出張がおっくうだと感じていたが、
名古屋に行く日が待ちきれなくなった。

妻には休日出勤と伝え、何度も高柳とホテルで会った。
妻が、その言い訳を信じていないのは分かっていた。

私は知っていて、あえて仕事を口実に高柳に会いに行く。
妻が自分を送り出すときだけちらりと
嫉妬と怒りの感情を出すことに心を躍らせるために。

高柳をめちゃくちゃに抱きながら、
妻を本当に抱いたことが無いことに気がつく。
妻は、穏やかな、ただつながるだけの惰性な交わりを好んだ。
私は長年、そんな妻をつまらないと感じていた。

高柳は行為が終わるとたばこに火をつける。
それがたまらなくセクシーだった。
煙をくぐらせながら、彼女は私の手に、指をからめる。

私は彼女の横顔を見て、早く高柳を自分のものにしたいと思う。
しなやかな女豹のような女を、狩るのだ。

妻が嫉妬心を顔に出すことに満足感覚えている自分がいるのに、
反面、早く妻のほうから、離婚を切り出してくればいいのにと思う。

「おまえ、やばいぞ。」
奥村は会うなり唐突にそう切り出した。
「向こうの常務に、知られたみたいだ。
今日あたり、社長から呼び出しがあるかもしれん。」
3月なのに、とても寒い日だった。
だが、私は背中に汗が流れるのを感じた。

奥村の後ろから白井の責めるような視線が私を攻撃する。

相手の会社の常務に知られたんじゃない。
プロジェクトにかかわるメンバーすべてに知れ渡っているのだと、

理解した。

私は、口裏を合わせるために、高柳に電話をした。
何度コールしても出ない。
何通もメールをした。

―電話が欲しい。話がしたい。

高柳からは返信が無かった。

私は昼に行くと部下に言い残し、社外に出る。
無性に腹が立った。
自分をさげすんだ目で見た奥村に。
電話に出ない高柳に。
ここまで育ててやった恩を忘れて汚いものを見るような目で見た白井に。
自分では動かないくせに、口だけは出してくる、常務に。
そして、冒険冒険と浮き立って、足元をすくわれた自分に。

怒りにまかせて歩いていると、ふっとブティックが目に入る。
妻が勤めているブティックだ。

ショーウィンドーにふらふらと近づくと、
アルバイトなのか、若い男に的確に指示を出し、お客様に笑顔で接客する妻が目に入る。

妻はこちらに気がつくことなく、楽しそうに仕事をしている。
自分の仕事をしている女の顔だった。
店の細部まで気を配っている。

完全に経営者の顔をした妻がいた。
妻は、私に気がつかなかった。
窓の外を眺めるなどということなく、仕事に打ち込んでいた。
私は踵を返すと、会社付近の外資系チェーン店で安いハンバーガーを購入する。
私はもう、妻の料理を食べることは無いのかもしれない。

それでもいい。
高柳と一緒になろう。
タイミングはおかしくなってしまったが、二人でなら、いい会社を作れるだろう。
本当の意味でパートナーになるのだ。

そんな妄想にふけっていると、携帯電話の電子音が鳴る。
電話は奥村からだった。
「おい、今どこにいる。社長がミーティングをしたいと言っている。3時以降で、何時なら都合がつく？」
「3時から、予定は開けられる。」
なら、3時な、と言って電話は切れた。
胃に冷たいものが走る。

30年、積み上げてきたキャリアが一瞬で崩れるのかもしれない。
だが、こうも思う。
その程度のキャリアしか、積み上げてこなかったのだと。

社長室では直接何かを聞かれることはなかった。
ただ、部を束ねるものとして、節度ある行動をするようにとの達しだった。
そもそもプライベートな問題だ。
考えてみれば、社長にどうこう言われることでもないだろう。

私はほっと安堵の息をついた。
しかし、次の社長の発言に私の心臓は止まりそうになった。
「有川君。君も大分社歴がながい。どうだい、今回の合弁会社の社長に就任しないか。」
晴天の霹靂の出来事であった。

事実上の、左遷だった。
高柳の会社と合弁会社を作り、そこの会社の社長に就任しろと言うのだ。
切り離されたと瞬時に悟った。
この話しを受けても、断っても、自分のキャリアは終わったのだと悟った。
受けたら、とんでもないノルマを押し付けられるのだろう。
タイタニックの船長を任されるようなものだ。
断ったら。仕事は来ないだろう。
この年だ。早期退職を促されるに違いない。

・・・さんざん、高柳と事業を起こし、会社を捨てるつもりで居たのに、
いざ丸腰で会社から投げ出されそうになり、足がすくんだ。

その程度の覚悟だったのだ。

ふと携帯を見ると、高柳からメールが来ていた。
いつものホテルで待っていると。

私には高柳が必要だった。
妻に言えば、会社を辞めていいと優しく言ってくれるだろう。
生活なんて何とかなると。

そして、私を盲目的に信じてくれるのだ。
人生の起動を何とか修正するだろうと。

妻の顔を見たくなかった。
私は、高柳に逃げたのだ。

ハンバーガー（後書き）

夫視線。
めまぐるしく舞台が変わって読みづらいですよね。
もう少し、時間が出来たら修正するかも。

次回、夫目線最終回。
あと2話で連載終了です。

お弁当

社長就任が決まってから、めまぐるしく環境が変わった。
連日続く出張、会議、打ち合わせ。

あの日、ホテルで高柳と愛し合ってからメールをする時間すら持てなかった。
社長就任について、内々に打診が会ったことを高柳に伝えた。
高柳は何も言わず、私を求めてくれた。
彼女と情熱的な夜を過ごしながら、公私共にパートナーになりたいと強く感じた。
彼女はむやみに私を信用したりしない。
自分の足で立てる人間だ。
良いパートナーになれるだろう。

そして私は新しい合弁会社を引き受けると決めた。

新幹線の中で駅弁を食べる。
１２００円もする弁当なのに、おいしいと感じない。
ガムのような肉の味。味が濃いだけの煮物。
冷めていたが妻のおにぎりだけの弁当の方が、よほど彩り豊かでおいしかったと思う。
梅干の色がついたゴハンを口にほおばりながらそう思う。
会社と言うものは進むと決めたら恐ろしいほどのスピードで物事が進む。
会議、打ち合わせ、決済、稟議、また決済。
昼夜を問わず、仕事に打ち込んだ。
どう考えても負け戦だ。
打ち合わせをするたび、全員が確信していることだと再確認するば

かりだった。

「離婚しよう」
社長就任が決まってから言おうと考えていた。
五月だというのに嫌になるほど暑い日だった。
出張からようやく帰ってきたその日、なかなか切り出せなかった言葉をついに伝えた。
今日は午前中は半休を取っている。
妻が渋るようなら、午前中一杯説得に使うつもりでいた。
だが、妻は予想外にすんなりとうなづいた。
「わかった」と。
手元のおいしそうなにおいがするご飯から目を離すことなく。
そして、いつものように仕事に出て行ったのだ。
私にかまうことなく。
一年の交渉の末勝ち取った離婚のはずだが、
なぜか、どうしようにもないほど心が沈んだ。

だが、ついに私は自由になるのだ。
私は高柳に会いたいとメールをした。

午後出社すると休憩室に奥村がいた。
「社長出勤かい。」
からかうように奥村が言う。
私は自動販売機に１００円を入れてコーヒーを買う。
「連日休日返上で働いているんでね。
今日はプライベートでも決着をつけようと思って半休を取ったんだ。
」
奥村は嬉しそうな顔をする。
「そおか。ついに目を覚ましたか！

散々奥さんに苦労かけたんだし、これから転勤だのなんだので
もっと苦労をかけるんだから、ちゃんと捨てないでくださいってお
願いしろよ！」
奥村は、どうやら逆に捕らえて様だった。
「いや、散々苦労をかけたんでね。今日離婚の承諾をもらったんだ
よ。
転勤なんかになったら、せっかくあいつも仕事を始めたのに、
また辞めさせる事になってしまうしな。」
奥村は異星人を見つめる目で俺を見る。
「奥さんにまた離婚を切り出したのか？」
ああ。と応えて休憩室を後にした。

高柳の居るホテルに着いたのは１０時を回った頃だった。
すでにワインをあけていた高柳に近づく。
「社長就任おめでとう。」
彼女は私の分もワインを注いでくれる。
「・・・ありがとうと言うべきなのかな。」
私は一口でワインを飲み干す。
高いワインなのかもしれないが、味の違いなどわからない。
今は、アルコールだったら何でもいい気分だった。
彼女はそんな私の心を見透かすように、口を開かない。
「予定は狂ったが、新しい社の社長になるんだ。
しかも、いくら荷物事業の切り離しとはいえ、大手企業の傘下には
違いない。
私が社長に就任したら、公私共にパートナーになってくれるね？」
私はもうワインを飲まなかった。
彼女にしっかり向き合った。
ようやく妻と離婚の約束も取り付けた。
高柳さえ、うんと言ってくれれば。
私はタイタニックに乗っても船を沈めない知恵を絞れる。

「私、部署移動が決まったの。」
何かを決心した顔で話し始める彼女に愕然とした。
「どういうことだ？」
「名古屋プロジェクトは合弁企業ができることで、
私の部署からは手が離れるわ。
私は、海外資材部にもどって新しいプロジェクトに参加するわ。
あなたも、奥さんと別れるなんて馬鹿なことを言わないで。
彼女、あなたの影となり日向となり支えてくれたんでしょ。」
彼女は私に諭すようにいう。
「沈むとわかっている船からは下りるということか。」
口から笑が漏れてくる。ひとつもおかしくないのに。
彼女は近くにあるバックを手にすると、何も言わずに部屋を出て行った。

終わるのはあっけない。
あんなに熱く激しく愛し合ったのに、何も残らなかった。
私も、彼女を追おうとは思わなかった。

プライドを捨てて、離婚したくないと何度も私を説得しようとした妻。
私が高柳を抱いて帰ってきたのを知っていても、
おかえりなさいと優しく出迎えてくれた妻。
どんなに食べるのを拒絶しても夕食を作り続けてくれた妻。

私は途方もないむなしさに襲われていた。

いつも彼女と逢瀬を楽しんでいたホテルにとても泊まる気はしなかった。
肉体も、心もぼろぼろだった。

あんなに変化を望んでいたのに。
何もない自分と向き合って初めて自分がとんでもないことをしたのだと気がついた。

ふらふらと家に帰る。
電気が全部消えていた。
罪悪感で、なかなかドアノブに手が出なかった。
おかえりという妻の姿もない。

長年の習慣でリビングに足を運ぶ。

誰も居ない、電気が消えたリビング。
私はかばんを投げると、麦茶を取るため冷蔵庫に手をかける。

おいしそうな筍ごはんがそこにあった。

―おいしそうなお弁当だね。

皆がランチに繰り出したお昼休憩中、
彼女は一人電話のそばでゴハンを食べていた。
おいしそうに嬉しそうに食べる姿に交渉が上手く行かず
苛立っていたきもちが嘘のように引いていった。

どんなお弁当を食べているのだろうか。

彼女の横顔に近づくと、後ろから覗き込む。

おいしそうに炊けた筍ごはん。

思わず声をかけていた。
彼女は真っ赤になってうなづく。
人が居るとは思っていなかったのだろう。
緊張させて悪いことをしてしまった。
私は営業管理課に頼んでいた資料を取ると、事務所を後にした。

そんな昔のことを考えながら筍ごはんをレンジに入れる。
考えてみたら、私はレンジを自分で使ったことがなかった。
全部妻がやってくれた。
日々の掃除も。子育ても。親の介護も。利用理も。
温かい筍ごはんをかきこむと目の奥が熱くなってきた。
自分に泣く権利がないことはわかっていた。
だが、鼻の奥がツーンとするのをとめられなかった。
筍ごはんがおいしかった。
妻の味付けだった。

客間で寝たその朝、妻と顔を合わせることに恐怖を感じた。
離婚の話しを進めなくてはいけない。
名古屋に向かう日は待ってくれない。
来週には職場に近いアパートに引っ越すことになっている。
私は憂鬱な気分でリビングに向かう。

「おはよう。」
妻は何もなかったような顔で私を迎える。
「・・・おはよう。」
私は少し枯れた声で挨拶を返す。

「朝ごはんいる？」
と何事もないように彼女は問いかけてくる。
私は妻に遠慮して要らないと応え、
かばんを取ると逃げるようにリビングを後にする。

玄関で革靴に足を入れていると、
妻がお弁当を玄関にそっと置く。

久しぶりに見る、見慣れた弁当箱だった。

私は思わず妻を見つめる。

妻はあの日のように、真っ赤になってうなづいた。

私はお弁当を大切にかばんにしまうと妻に言う。

「行ってきます。」

私は、タイタニックの船長だが、この航海を成功させられると確信した。
おいしいお弁当と、妻がそこにいるから。

お弁当（後書き）

２５年も夫婦をやっているわけです。
病めるときも健やかなる時もあるでしょう。

ここからです。
壊れたものを修復するのは難しい。

幸せな話しが好きな人はここで読了してください。
この夫婦を最後まで見守っていただける方はどうか、
次の話しを読んでください。
明日ＵＰします。

ある夫婦の物語

母の様子がおかしいと気がついたのは１０歳になる息子を連れて里帰りした日だった。
私の息子を見て、拓と弟の名前を呼んだのだ。
母は認知症となっていた。

父の行動は驚くほど早かった。
母の認知症がわかった次の日には会社に辞表を提出していた。

これには、私も母も驚いた。
連日お偉いさんが、家に尋ねてきた。
父が社長に就任したのは２０年ほど前のことだった。
誰もが上手く行かないだろうと考えていたプロジェクトだったという。
しかし、父は驚くほど地味な手法で会社を立て直した。
最初の３年は赤字を出したが、その後はギリギリのラインで安定させたのだ。
そこからだった。切り離しをした親会社とメーカーは父の会社に集中的に資本を集めた。
そして、それなりの売上を出す会社に成長させることが出来たのだった。

母はブティックでの仕事をやめ、父についていった。
レシピだけ毎週ブティックに送り、母の監修で学生がお弁当を作るというのが常になった。
そして、月に何度か東京で料理教室を開いたりしていた。
その度に父休日をつぶし母の送り迎えをした。

私が結婚した頃、父の会社はいよいよ軌道に乗った。
東京の本社に相談役として戻り、週に何度か名古屋に出向くスタイルになった。
母はカフェの仕事をしたり、料理本を出したりとまったりとした暮らしを楽しんでいた。

私はというと、結婚して子供を産んでからも精力的に仕事をした。
派手な功績はないが、地道に成果は出している。
父の友人の奥村さんに言わせると、驚くほど父親に似た手法だそうだ。
私も子供を二人出産し、弟も最近結婚した。
今は大阪に転勤となっているが、盆と正月には顔を合わせる。
そんなどこにでもありふれた家族であることを幸せに思っていた。

母も年をとり、物忘れが多くなってきた。
そんな風に家族は感じていた。
いつもにこやかで、料理も自分でつくる母がまさかと思っていたのだ。
母の認知症が発症したとき、私は仕事をやめて介護をするべきか真剣に悩んだ。
ある程度、母の認知症は進行していた。

７０歳を過ぎても相談役として活躍していた父だったので、
会社としては出来るだけ勤務時間を考慮するので顧問として就任して欲しいと
何度もお偉いさんが頭を下げにきたが、父は全てを断った。
奥村さんも、何度か父を説得しようとしに我が家に来た。
「奥村、私はね、私がいないからといってどうこうなるような
会社の経営はしてこなかったよ。
今年７０だ。もう、若い連中に世代交代するべきだと考えていたと

きだった。」
父は、現社長と役員となっていた奥村さんに伝えるが二人は引き下がらなかった。
「しかし、ここまであなたが大きくした会社だ。
奥さんも、そこまで認知症は酷くなっていないでしょう。
勤務時間は考慮するので、どうか考え直してもらえませんか？」
しかし、あっさりと父はその意見を却下した。
「もちろん、何もかも投げ出すわけではない。
行き詰ったらいつでも相談に来てくれてかまわない。
でも、役職名がついているかぎり、責任は発生する。
そうなれば、中途半端なことはしたくないんだよ。
私は今の会社に未練はないよ。
そう、未練がないように働けたのも、皆妻のおかげだ。
残りの人生は全部、妻のために使いたいんだ。」
父の決意を感じ取った奥村さんは最期には納得していた。

帰り、私はお二人を駅まで車で送ることにした。

年若い社長は私に言った。
「すごい夫婦愛ですね。
私には、妻のためにメディアにも取り上げられているこの会社をあんなにあっさり捨てられるとは思えない。」
奥村さんは何かを思い出すように応えた。
「４０年夫婦をやっているんだ。
あそこの夫婦は信じられない試練を次々乗り越えたんだ。
君も、有川にいつまでも甘えていないで、優れた経営者にならなくてはいけないよ。」
奥村さんの言葉を実感したのはそれから大分先のことだった。

父は会社を辞めると、母の世話をするようになった。

母の症状には非常に波があった。
普通の生活を送っている日もあれば、私の顔も忘れているときがあった。
落ち込んでふさぎ込んでいるときもあれば、
何かにとても腹を立てているときもあった。

父は母が何度同じ話しを繰り返しても、うんうんと話しを聞き、
理不尽な怒りをぶつけられても、ごめんねと何度も謝りなだめた。

症状が軽いときには、二人で旅行にいったり、
散歩がてら日帰り温泉に言ったりした。

母の病状は、時間をかけてじんわりと進行した。

ある日、母の顔をみに帰った時のことだった。
「よく、恥ずかしくもなく顔を見せられるね！」
鬼のような形相をした母に詰め寄られた。

年をとっているのに、結構な力でたたいてくる。
どうしていいのかがわからず、固まっていると、リビングから父が飛んできた。
「なんで、こんな女なんかかばうのよ！
私よりこの女が好きだから?！最後の恋人だからでしょう！！」
母は信じられない力で暴れた。
母は私の母ではなかった。
一人の女だった。
父は母を抱きしめ、なだめながら怒鳴るように私に言う。
今日は帰ってくれと。

私は車に戻っても震えがとまらなかった。

就職した頃、なんとなく両親が険悪だったのはわかっていた。
奥村さんが大分昔社長に話した言葉がよみがえる。

そして、母が父を許していないことがひしひしと伝わった。

母の病状はどんどん悪化した。
もう、私の顔を思い出さない日の方が多かった。
弟と何度か父に母を施設に預けてはどうかと提案したが、父は在宅介護にこだわった。
時に、母は父に暴力を振るった。
だが、父は母が怪我をしないように、よけることなく受け入れた。
やがて母が疲れてしまうと、母をぎゅっと抱きしめて、何かを祈るように母の耳元でささやいていた。
私たち姉弟はそれを見守ることしか出来なかった。

母は、時々思い出したかのように料理をした。
火をつけっぱなしにしたり、鍋のありかがわからなくなってしまうので
つい手を出したくなったが、私たちが台所に入ることを許さなかった。
父だけがそこに入ることを許された。
料理の途中で手順が抜け落ちてしまうことも多々あった。
しかし、調味料を入れ忘れて、決しておいしくない料理を父は一口も残さず食べた。
おいしい。おいしいと。

母がいなくなったと連絡があったのは、両親の結婚４９周年目を祝ってしばらくたったころだった。
ついに、母の徘徊が始まってしまった。

私たちは必死に探し回った。
母はかつて勤めていたカフェの付近で警察に保護されていた。
父は母を抱きしめ、おいおい泣きながら良かった良かったと母を抱きしめた。

ある、夏の暑い日、突然父から、赤い毛糸を買ってきてくれと電話が入った。
ついに、父まで痴呆をわずらったのかと、内心ドキドキして実家に戻った。
父は母の腕に赤い毛糸を優しく巻きつけ、自分の腕にその片方を巻きつけた。
これならもう離れることはないだろうと。
子供のような恋愛を７０を過ぎた自分の両親が行なっていることに複雑な感情を覚えながらも、
父の嬉しそうな様子に、それでいいかと心が温かくなった。

珍しくは母意識がしっかりしていて。

「これなら来世も離れることなく仲良し夫婦なんじゃない？」と私がからかうと、
母は「今世かぎりで十分よ」っと笑った。
父はショックを受けてしょぼくれた。
その姿を見て、母と二人で笑った。

父はふてくされてキッチンにお茶を入れに行ってしまう。
私は思いきって、母に聞いてみた。
「お母さんは、お父さんのこと許してる？」
母は穏やかな顔でいった。
「許しているよ。でも、時々意地悪してしまうのね。
あの人、昔言うことに事欠いて最初で最後の恋をしたっていったの。

結婚２５年目の浮気でね、相手はお母さんと結婚する前の恋人。
もう、それはショックでね。お父さんのこと許せないと思ったの。」
初めて聞く、両親の恋愛話だった。
「結局お父さんはお母さんの下に戻ってきたから受け入れたけどね、
腹の底ではずっと許せなかった。
最初で最後の恋よ？真ん中の２５年の私は何よって。」
年老いた母だったが、人生と戦った女の顔だった。
「でもね、金婚式を目前にして思うのよ。
あの人、結婚前をカウントしなければ５０年のうち４９年、私だけ
を愛してきたのよ。
一年くらいの余所見、許してあげようと思ってね。
あんなに、許せないと思っていたのにね、
もう最近何に腹を立てていたのか思い出せないことが多いのよ。
忘れてしまえるって本当に幸せね。
お父さんには悪いことしちゃっているけどね。
何十年も前のことをこんなに責められてしまっているのだから。」

腕に絡まる赤い毛糸を嬉しそうになでながら、母は言った。
そして、それが母との最後の会話になった。

いよいよ母の症状が重くなった。
娘のことも、息子のことも忘れてしまった。
時には父のことも忘れてしまっていた。
私たちが触ることも近づくことも嫌がることが増えた。
だが、父だけは嫌がらずに触れさせた。
怒りをぶつけるのも、笑うのも、父にだけ。

付きっ切りで看護をしていた父だったが、
ある日、出かけたいと電話をしてきた。
母を弟夫婦に預け、私は父を連れ出した。

父は迷わずデパートの有名宝飾店に足を運ぶ。
そこで何個も指輪を見て、シンプルだが非常に質のいい金の指輪を購入した。
金の価格が高騰する現代で、何のためらいもなくキャッシュで。
帰りの車の運転は、いつも以上に慎重になった。
金婚式に母に渡すのだと張り切っていた。

しかし、母が生きているうちにその指輪をはめることはなかった。
数日後、母は実にあっさりと天国に旅立った。
5年にわたる壮絶な介護の割には、実にあっさりとした旅立ちだった。

父の嘆きは想像以上だった。
葬儀の間、母が父のことを連れて行ってしまうのではないかと不安に思った。
それ程父は打ちひしがれていた。
母の葬儀は偶然にも金婚式のその日だった。

火葬場で、父は何百万もするその金の指輪を母に持たせようとした。
これには親戚一同あせったが、父は銀の指輪も渡せなかったのだからせめてと譲らない。
結局、葬儀場の人がやめてくださいと冷静に伝えてきて、事なきを得た。

火葬場で、煙となって昇る母を見つめて父は奥村さんに言った。

「私が馬鹿なことをしてしまったせいで、銀婚式を祝えなかった。
金婚式だけでも祝いたかったんだがな。人生ってやつは上手く行か

ないものだな。」
奥村さんは父の方に手をおいて伝える。
「あんなにいい奥さんに出会えただけでも、
お前の人生はこれでもかというほど上手くいったってことだよ。」

母の死後、父はしぼんだ風船のようだった。
そんな父の元に弟の６歳になる娘が近づく。
手にはあんまりおいしそうではないおにぎりを持って。
父は可愛い孫娘に目を細める。

「おばあちゃんがね、言ってたの。
おじいちゃんがね、哀しそうにしていたら、お弁当をはいって渡してあげなさいって。」

父は、おにぎりを持ったまま泣いた。

５０年連れ添った夫婦だけがわかる言葉で、母は父を許したのだろうと思った。

普通の夫婦だった。

２５年間愛をはぐくみ、子育てをし、仕事をした。
２５年目に、誘惑に負けてしまったり愛する人を傷つけたり、新しい才能を開花させたりした。
２６年目からはよりかたくなった夫婦の絆で困難を乗り越えた。
４０年目からは献身的な愛を捧げた。

ただ、それだけの、夫婦の物語。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3993v/

ある夫婦の物語

2011年9月27日00時55分発行